中国新聞
(3) 内政・総合 17版　2008年（平成20年）8月10日（日曜日）

今を読む

経営コンサルタント
岡村 有人

心の豊かさ見つめ直す

「人間復興」と広島

おかむら・くにと　1947年広島市生まれ。広島大大学院修了。日立製作所中央研究所を振り出しに複数の企業で映像・音響分野の技術開発に従事。2003年音響機器メーカー・ボーズの副社長を退職後、独立。東京都世田谷区。

瀬戸内の夏。透明な日差しは体の芯まで染み込んでくる。東京に住み始めてはや三十五年。戦後間もなく広島に生を受けた私は、毎年この季節になると、ある種の原点回帰のような気持ちになる。爆心から一・六キロの昭和町で被爆した私の両親と母の両親四人は、生き地獄の市街地を逃れて、広島湾沖の似島に収容された。

物心ついたころの八月六日の前夜、わが家の茶の間では毎年決まって原爆の体験談が生々しく語られた。それは臨場感を伴って幼子の白紙の記憶に刻まれ、思春期を迎えるころには「モザイク絵」が一つの「物語絵巻」に凝集され、私の疑似被爆体験となった。

被爆六十周年の二〇〇五年、私は「七つの川は銀河に届け」という本を出版した。両親が語った被爆直後の広島について書いているが、もうひとつ書き留めておきたいことがあった。それは修羅場にありながら、人々が互いに助け合い、家族のきずなに結ばれて生きた時代のこと、貧しいけれど人々が人間らしく振る舞った昭和二十年代後半から三十年代のことである。

○　○　○

被爆直後から二年間、わが家族は全壊を逃れた郊外の知人宅や親せきを頼る流浪の民であった。そんな時、疎開させてあった母の着物が進駐軍に高値で売れ、比治山南西麓の土地を手に入れた。私が物心ついたころには、六畳と四畳半の二間を中心にした手づくりの家が完成。家の基礎は左官や大工に委ねたが、あとは器用な父が母とともに仕上げたのである。

比治山は当時の子どもたちにとってこの上ない探検の場所で、さまざまな遊びをつくり出したものである。親に黙ってナイフやのこぎりを持ち出しては、うっそうとした比治山の木々を切ってすみかをつくる。

昭和三十一年、メルボルン・オリンピックが始まると、ラジオの前で額を寄せ合って短波放送に聞き入り、地球の裏側の祭典に夢を膨らませた。早速「オリンピックごっこ」が始まった。幅跳び、三段跳び、それに皆実小学校の正門にタッチして戻ってくる時間を競う長距離走。皆負けず嫌いであったが、仲良く懸命に遊んだ。こんな遊びが創意工夫をはぐくみ、体を鍛えたのであろう。

○　○　○

廃虚の中で人々を復興へと駆り立てたのは、生きることへの勇気と希望であり、命に対する祈りであった。広島の街は奇跡的復興を実現した。この復興は昭和三十年代から四十年代の右肩上がりの繁栄へと引き継がれ、昭和五十年代に入るとさらなる成熟へ。その後は「真の豊かさ」を定義できないまま、バブル経済を駆け抜け、それに続く閉塞感は今、私たち皆感じるところである。

たゆまぬ科学技術の進歩は私たちの生活を豊かにはしたが、一方で取り返しのつかない危険をはらんでいることに人類は気づきはじめた。今日、私たちが「繁栄」と称するグローバル経済は限りない物的欲望を根本原理にしている。

しかし、この限りない欲望は人類と地球上のすべての尊い命を破壊へ導く「パンドラの箱」である。そんな欲望に基づく価値観を改め、心の豊かさに基づく「人間復興」の価値観を全人類的に共有することこそ、核問題や環境問題といった難題に取り組む重要な手掛かりとなる。その行動が広島の一人一人の心から出発し、全人類的祈りに集約された時、広島は世界の「真珠」になるだろう。

もう十年以上前、親友のアメリカ人夫妻を東京・両国の江戸東京博物館に案内したことがある。その中に東京大空襲後の廃虚の立体模型があり、その前まで来た時、夫妻の歩みは自然に緩まりそして止まった。無言の時間が流れた。しばらくすると夫妻の目からは大粒の涙がはらはら流れ出て言葉にならなかった。アメリカ人と日本人。爆弾を落とした側と落とされた側という構図を超えて、人間同士として分かり合えた感動が私の胸に去来した。